

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

ミクロネシア連邦ポーンペイ島のナン・マドール遺跡とシャウテレウル王朝期の遺跡について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード: ミクロネシア, ポーンペイ島, 巨石文化, ナン・マドール遺跡, 世界文化遺産 作成者: 片岡, 修, 長岡, 拓也, 長友, 俊一郎 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学, 古代学協会
URL	https://doi.org/10.18956/00006029

ミクロネシア連邦ポーンペイ島のナン・マドール遺跡と シャウテレウル王朝期の遺跡について*

片 岡 修

長 岡 拓 也

要 旨

今夏の調査に基づき、(1) 確認したシャウテレウル王朝期の遺跡を検討し、(2) ナン・マドール遺跡の調査成果とユネスコ世界文化遺産登録申請の進捗状況を紹介し、(3) 今後の課題を明確にした。

ナン・マドール遺跡に隣接するテムエン島内で、3種の祭祀遺構を確認した。テムエン島だけでなくポーンペイ島各地に築かれた同類の遺構との比較研究から、ナン・マドールを基盤にポーンペイ全島を統一したシャウテレウル王朝の支配構造を理解する上で重要な考古学資料となった。

ナン・マドール遺跡については、ユネスコ世界文化遺産登録のために実施した2011年の現状調査に始まり、その後、現地政府の関係機関、土地所有者、観光や環境や文化財関連の専門家らによるワークショップが開催されてきた。2015年2月の申請に向けて書類作成のための協同作業が進行中である。本調査の採集情報が申請書の基礎資料となることは確実である。

キーワード：ミクロネシア、ポーンペイ島、巨石文化、ナン・マドール遺跡、世界文化遺産

1. はじめに

科学研究費助成事業による『ミクロネシアにおける巨石文化の成立と社会複雑化のプロセスを探る考古学的研究』の一環として、平成26年7月29日から8月15日にかけてミクロネシア連邦のポーンペイ島で考古学調査を実施した。本事業は「総合的比較研究」と「仮説検証的事例研究」で構成され、前者はミクロネシアの巨石文化の諸事例を比較分析し、巨石文化の成立と社会複雑化のプロセスにおける「地域ごとの相違点」と「地域を越えた共通点」を抽出し、モデル構築を行うことを目的としている。一方、後者は前者で構築したモデルが実際の事例に合致することを確認するため、特定の遺跡を選択し、実証的な検証を行うことを目的としている。

昨年度「仮説検証的事例研究」班は、グアム島北西に位置する米海軍通信基地内のラッテ期

村落跡であるハプト遺跡の考古学的調査を実施した。本年度もその継続調査を企画していたが、米軍の政策変更によりハプト遺跡の発掘調査が困難になったため、ユネスコ世界文化遺産登録申請作業が進行中のポーンペイ島のナン・マドール遺跡の調査に変更を余儀なくされた。

本稿は、今夏のフィールドワークに基づき、(1) 確認したシャウテレル王朝期の遺跡について検討し、(2) ナン・マドール遺跡の調査成果とユネスコ世界文化遺産登録申請の進捗状況を紹介し、(3) 今後の課題を明確にすることを目的としている。

1.1 ポーンペイ島の地理と環境

ナン・マドール遺跡が築かれたポーンペイ島はポーンペイ州の主要島で、北緯6度54分、東経158度15分のミクロネシアの東カロリン諸島に位置している。西方のヤップ州とチューク州、東方のコスラエ州の計4州でミクロネシア連邦を構成し、ポーンペイ島のパリキールに主都が

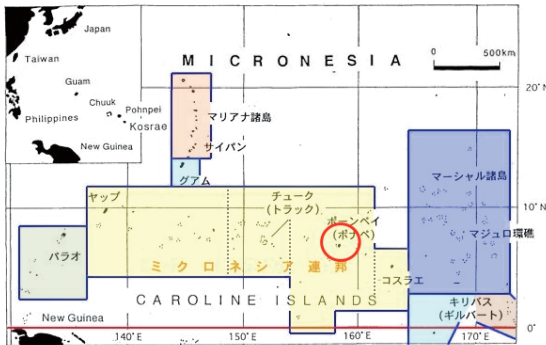


図1 ミクロネシアとポーンペイ島の位置
(原図：JCIC)

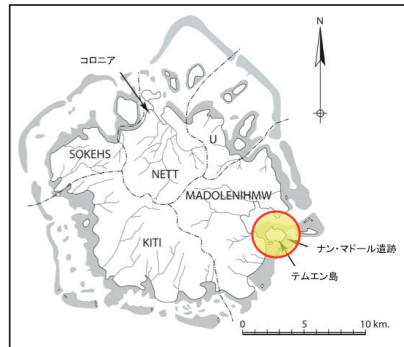


図2 ポーンペイ島
(原図：Government of FSM)

置かれている (図1)。行政的にはソケース、ネット、ウ、マタレニウム、キチの5地区から成り (図2)、近隣のパキン環礁とアント環礁を含む8環礁島がポーンペイ州に属している。

本島はグアム島とパラオ共和国のバベルダオブ島に次いでミクロネシアで第三の規模の火山島で、最高峰789mのナーナラウト山は北マリアナ諸島のアグリハンに次いで二番目に高い。また、700m級のウングネニ山やトレンウェリック山など標高600mを超える山々が11ヶ所あり、地質的には安山岩線の東に位置し、主に玄武岩で形成されている。

最大径23kmで面積334.2平方kmのほぼ五角形のポーンペイ島は、81%の山地と14%のマングローブ湿地とわずかに5%の平坦地から成っている (Office of Planning and Statistics 1979)。内陸部は密集した森林と凹凸の激しい山地で特徴づけられ、海岸付近まで張り出した尾根の合間をぬってナーナラウト山から北流するキエプ川、東流するセニペーン川、南西流するキチ川など大小42本の河川が裾礁に流れ込んでいる。20ヶ所に水道を持つ堡礁と広大な礁湖がテムエン

島周辺を除くほぼ全島を囲み、礁湖内には23の礁湖島が形成されている。

気候は高温（年平均27℃）多湿（年平均85%）で多雨（年降水量4,875mm）の熱帯多雨林気候で特徴づけられ、12月から5月の期間は北東あるいは東貿易風が卓越している（NOAA 1990）。

1.2 ポーンペイ島小史

ポーンペイ島における最初の人の居住は、少なくとも2000年前に開始されたことが考古学研究により明らかにされている（Ayres 1993; Galipaud 2001）。Ayres（2002）は先史時代からAD.1886以降に始まる植民時代までを、（1）初期居住時代（1000-0 BC）、（2）ペインアイス時代（AD.0-800）、（3）ナン・マドール時代（AD.800-1500）、（4）ナンマルキ時代（AD.1500-1825）、（5）キリスト教伝導時代（AD.1825-1886）、（6）歴史時代（AD.1886-）の6期に区分している。

西欧人によるポーンペイ島の発見史は、1529年のスペイン船を指揮したサーベドラの目撃の可能性を除くと、1595年のスペイン航海士キロスに始まると考えられ、その際にアント環礁も発見されている（Hezel 1979）。その後の発見は記録上散発的に見られるだけで、著名なものとしては1826年に遭難の結果漂着して1833年まで滞在したオコーネル（O'Connell 1836）や、1828年に寄港したロシアのセニャビン号を率いたルトケをあげることができよう（Lutke 1971）。ただし、オコーネルの漂着の正確な時期については不明で、記載内容の信憑性についても議論されてきた（Riesenburg 1968）。1830年以降になると、活発な捕鯨活動に伴い欧米人との接触が急増し、1852年にはキリスト教の布教目的で宣教師や伝道師や医師らがボストン・ミッションのホノルル支部より派遣された。1880年代半ばに列強国による植民政策が活発化し、1886年にはポーンペイ島を含む広大なカロリン諸島がスペイン領となった。しかし、1899年に米西戦争で敗北したスペインは、領土としていたミクロネシア諸島をドイツに譲渡し、1914年までドイツ統治時代となった。第一次世界大戦後、赤道以北の旧ドイツ領は国際連盟による委任統治領として日本が受任国となったが、第二次世界大戦後の1947年にアメリカの太平洋諸島信託統治領となった。1979年にミクロネシア連邦が建国され、1986年にアメリカの自由連合国となり信託統治領時代の幕を閉じ現在に至っている。

1.3 考古学研究史

ポーンペイ島周辺での捕鯨活動、キリスト教の布教活動、そしてスペイン、ドイツ、日本、アメリカによる統治背景に伴い、欧米諸国や日本からの訪問者が旅行記や民族誌や報告書という形でナン・マドールに関する記録を残してきた。歴代の首長を埋葬するために築かれたひときわ目立つナンタワス遺跡は、研究者による発掘だけでなく盗掘の対象にもなった。

考古学関連では、遺跡の描写 (Gulick 1857) にはじまり、クバリー (Kubary 1874)、ザルフェルト (Sarfert 1913)、クリスチャン (Christian 1899)、ハンブルク (Hambruch 1936) らは主要な墓跡の発掘や遺物採集を精力的に行なった。中でも、ハンブルクは採集遺物を詳細に記録し、略測とはいうものの比較的正確に作成されたナン・マドール遺跡全体図は現在でも研究者によって頻繁に使用されている。日本委任統治時代に入ると、長谷部 (1915) や八幡 (1932, 1959) や村主 (1942) がナン・マドール遺跡の発掘を行なったが、その成果は断片的に公表されたに過ぎない。日本国内の大学や研究機関に所蔵されているミクロネシアの採集資料を報告した印東 (Intoh 1999) は、ナン・マドール遺跡から採集された貝製品を少なからず掲載している。

アメリカ信託統治領下、1963年にスミソニアン研究所がいち早くイテート遺跡の発掘を行ない、炭素測定年代を公表した (Radiocarbon 1968)。1970年後半以降には、アメリカによる文化財保護行政の一環でナン・マドール遺跡の研究が進展した。1974年に指定遺跡として登録されたナン・マドール遺跡の範囲確認調査を1978年に実施したサクスらは (Saxe et al. 1980)、テムエン島だけでなくマタレニーム地区の広範な地域を研究対象とした。調査報告書で、ナン・マドール遺跡の具体的な保全と訪問者のアクセスの改善方法に言及している。とくに、ナンタワス遺跡とウーセントウ遺跡の早急な修築と、それに伴う考古学調査の必要性を主張した。一方、エアーズらは先史時代の居住形態を理解する目的で、ウ地区のアワック地域やキチ地区のアント環礁など島内の遺跡の発掘調査を実施した (Ayres and Haun 1980; Ayres et al. 1981)。

1980-1990年は、アセンズ (Athens 1980, 1985; Bath and Athens 1990) とエアーズ (Ayres 1993; Ayres et al. 1983) を中心に、初期居住と首長制の盛衰を理解するための本格的なナン・マドール遺跡研究が展開された時期と言えよう。ナン・マドール遺跡内の71の人工島の簡易踏査を行ったエアーズら (Ayres et al. 1983) は、遺跡崩壊の要因とそれらが複合的に影響していることを明確にし、パーンカティラ遺跡とウーセントウ遺跡の早急な保全と改善方法について述べた。一方、ナン・マドール遺跡との政治的な関わりを理解する目的で、バス (Bath 1984) はキチ地区内陸部のサブタカイ、エアーズとマウリシオ (Ayres and Mauricio 1997) はサラブック遺跡群の比較研究を行った。

1990年代以降には、南西約9kmに位置するアント環礁の遺跡が発掘されているが (Galipaud 2001)、ナン・マドール遺跡の発掘が行われることはなかった。2005年に片岡 (2005, 2006a, 2006b, 2007; Kataoka et al. in prep.) が行ったナン・マドール遺跡の発掘はアセンズとエアーズ以来15年ぶり、日本人主体の調査としては75年ぶりとなった。2005年以降、ナン・マドール遺跡を基盤にしたシャウテレウル王朝によるポーンペイ全島支配と地域社会の構造を理解する目的で、マタレニーム湾を挟んだ4km北のメチップとトラパイル地域の調査が行われた (片岡 2009, 2010, 2011, 2013; Kataoka in prep.; Kataoka and Nagaoka in prep.)。一方、エアーズ

(Ayres et al. 2009) らは、2008年にナン・マドールの外洋側のAngeir遺跡からKarian遺跡に至る長大な人工島の遺構平面図を作成し、墓跡（以下、ロロン）の調査を行った。また、ナン・マドールの居住者を支えた水と食料の供給地としてテムエン島の重要性を指摘した。

2010年以降にSeikel (2011) はナン・マドール遺跡の墓の形態と身分階層と社会構造の関係を、McCoyは (McCoy and Athens 2012) 蛍光X線分析によりナン・マドール築造に使用された玄武岩の産地特定と産地の時期的変化について研究を行った。また、2011年の文化遺産国際協力コンソーシアムが実施したユネスコ世界文化遺産登録に向けての現状調査は (JCIC 2012)、隣接するナーカップ湾の海底地形調査や数度にわたるワークショップなどを経てその後の一連の調査や活動につながっている (石村 2013a, 2013b, 2014)。現在、異なる分野の専門家らが2015年の世界遺産センターへの提出に向けて申請書の完成を目指している。

2. 調査対象遺跡の概観

調査は、ポーンペイ島南東に位置するテムエン島内に築かれたSilbanuz家（宿泊先）敷地内の遺構群と、テムエン島東麓の潮間帯に立地するナン・マドール遺跡を対象とした（図3）。前者には4基の周壁を持つ墓跡や祭祀場跡が残されている。墓の形態はナン・マドール内の遺構と類似しており、祭祀場跡はマタレニーム湾を挟んだメチップとトラパイルに至る半島地域に築造された遺構と類似している。

ナン・マドールという名称は、約1.5×0.7kmの長方形の範囲に築かれた大小95の人工島で構成される巨石建造物複合遺跡の総称である。広大なナン・マドールは、司祭者の居住した北東部の上ナン・マドール (Madol Powe) と、シャウテレウル王朝の首長が居住し儀式や政治を行った南西部の下ナン・マドール (Madol Pah) に分けられてい



図3 ナン・マドールと周辺遺跡

(地図：US Department of Interior Geological Survey 1983)

る (Hambruch 1936)。口頭伝承は各人工島の名称や機能や用途を伝えてきた (Bernart 1977; Hadley 1987; Panholzer and Mauricio 2003)。たとえば、上ナン・マドールのウセンタウ遺跡は、司祭者とシャウテレル王朝後の首長ナンマルキの居住地であったことを伝えている。またナンタワス遺跡 (写真1) は、高さ約8mに積み上げた柱状玄武岩の二重周壁内に3基の埋葬施設が築造されており、中央石室にはシャウテレル王朝の歴代の首長が埋葬されたと伝えている。一方、下ナン・マドールのパーンカティラ遺跡は全島を治めた首長たちの居住地で、宗教と政治のセンターであったことを伝えている。



写真1 首長墓があるナンタワス遺跡 (片岡撮影 2014)

現在に至る考古学研究 (Athens 1980; Ayres 1985, 1990) は、ナン・マドールが築かれた場所で2000年前に居住がはじまり、紀元500年頃に人工島の建設が開始されたことを明らかにしている。柱状玄武岩による建造物の開始 (Ayres et al. 1983) とイテート遺跡における祭祀の始まり (Athens 2007) から、紀元1000年～1200年頃に首長制が形成されたと考えられている。伝承によると、480km東方に位置するコスラエ島から来島したイショケレケルによって、シャウテレル王朝が征服されたことになっており、その時期は紀元1500-1600年頃に想定されている (Ayres 1990; Bath and Athens 1990)。王朝崩壊後ナン・マドールは廃墟化の一途をたどるが、人工島の一部は再利用されながら今日に至っている。因みに、イショケレケルは現在のマトレニーム地区の伝統首長ナンマルキの系譜上の第一代目とされている。

2.1 調査概要

本調査は、追加調査となった (1) 隣接した立地からもナン・マドール遺跡と強い関係を推定できるSilbanuz 家敷地内の遺跡と、当初から企画していた (2) ナン・マドール遺跡のインベントリー作成と遺跡の現状調査を実施した。以下、調査の目的や方法や結果に加え、2005-2014年にメチップ＝トラパイル地域で確認した類似の遺構と比較検討し、考察を加えたい。

2.1.1 Silbanuz 家敷地内遺跡

身分高位者が埋葬されたと考えられる墓跡やコミュニティに重要な祭祀場跡の形態を明確に

し、ナン・マドール遺跡や他地域との比較研究に基づき、シャウテレル王朝による全島支配の構造を理解することを研究目的とした。伝統首長ナンマルキからナン・マドール遺跡の調査許可を受けるまでの間、Silbanuz 家敷地内の4基の遺構の調査を行った。ナン・マドール遺跡内やメチップ＝トラパイル地域との比較資料の作成のため、遺構の清掃を行い略測図を作成した。ただし、4基の遺構のうち、祭祀場跡と考えられる Peilolo については時間的制約により遺構図の作成には至らなかった。

4基の遺構の形態的類似点として、(1)玄武岩を積み上げた周壁と内庭部に方形の構築物が築かれていることと、(2)崩落による不明な遺構を除き周壁の一方所中央に入り口が構築されていることをあげることができる。相違点として、(1)周壁の使用石材の違い(柱状玄武岩、丸石、両者の組み合わせ)と、(2)内庭部の遺構の構造の違い[石室を持つ墓、中央に炉跡のような凹みを持つ玄武岩やサンゴを積み上げた方形台状遺構(以下プラットフォーム)、単に玄武岩やサンゴを方形に積み上げた構造物など]をあげることができる。

以下に、確認した各遺構の形態と構造について記述しよう。

① Peipohnlong (図4)

1. 長軸は南北を通り、規模は10.9×13.8mを測る。
2. 周壁幅は約1.2mで、やや大型の玄武岩の丸石を使用している。
3. 入り口は不明。
4. 東西の緩やかな傾斜地に構築されたプラットフォームのため、東側は約1m、西側では50cmの高さに玄武岩が積み上げられている。また、内庭部は周壁から約40cm下まで埋土で整地されている。
5. 内庭部の北西寄りに、3.7×4.1mの方形に玄武岩の丸石が敷き詰められており、炉跡は認められない。

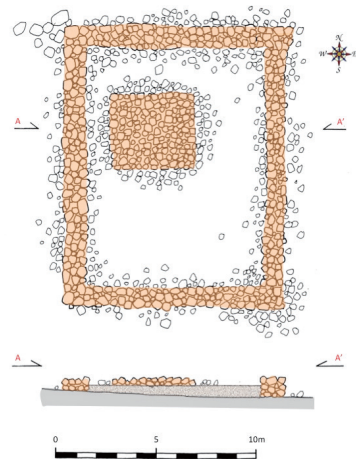


図4 ペイポーンロン遺跡

② Peipohn Painapap (図5)

1. Peipohnlong から東へ緩やかな傾斜の地道を下り、Silbanuz 宅に向かって道がほぼ直角に南へ折れるその南西角に立地している。
2. 長軸は南北を通り、規模は20.1×23.2mを測る。
3. 周壁の幅は約1.3mで、柱状玄武岩と玄武岩の丸石で築かれており、南壁中央に1.9m幅の入り口が設けられている。
4. 周壁の南東部にテラス状遺構が石敷きの上に張り出した形で構築されている。後世に

周壁の石を利用して築造されたと考えられる。

5. 周壁に沿って北側で1.5m、西側で1.3m、南側で1.7m幅に石列が構築されている。東側では2.8m幅で東壁に沿って玄武岩が敷かれている。
 6. 内庭のほぼ中央に、3.4×3.7mに玄武岩の丸石を高さ70cmに積み上げた住居跡のような構造をしたプラットフォームが築かれており、やや南寄りに約1m四方の炉跡と考えられる凹みがある。
 7. プラットフォームに沿って1.0m北、1.1m西側に柱状玄武岩の石列が築かれている。東側はプラットフォームの壁石が崩落しているため不明である。南側は石が移動しているため確定は出来ないが、
- 下述の Peintamw の周壁の入り口に柱状玄武岩を直角に並べられているのと同様の構造が築かれていた可能性が高い。
8. 東側の石敷き遺構北東角の近くに柱状玄武岩の立石が置かれている。

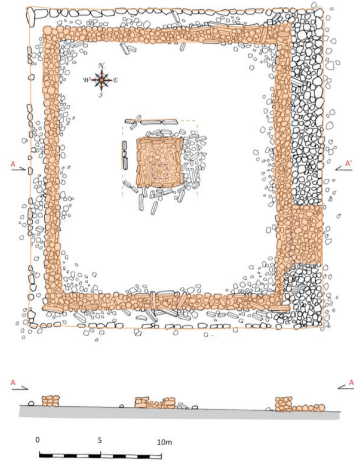


図5 ペイポーン・パイナバップ遺跡

③ Peintamw (図6)

1. Peipohn Painapap 遺跡の道を挟んだ北東側に築かれた典型的な口ロンである。
2. 規模は12.7×15.4mで、緩やかな南向きの傾斜地に長軸を南北に構築されている。
3. 高さ1.7mの南壁の中央に、幅2.1mで高さ40cmの玄武岩の丸石を敷き詰めた入り口が設けられている。
4. 入り口のすぐ西側に積まれた柱状玄武岩が最長で、2.3mを測る。
5. 南壁の幅は1.7mあり、残りの3壁は1.1~1.3mを測る。
6. 内庭部の北寄りに5.5×6.7mの規模で1.0mの高さに玄武岩を積み上げたプラットフォームの中央に、1.1×3.7mで深さ1.1mの石室をもつ墓が築かれている。

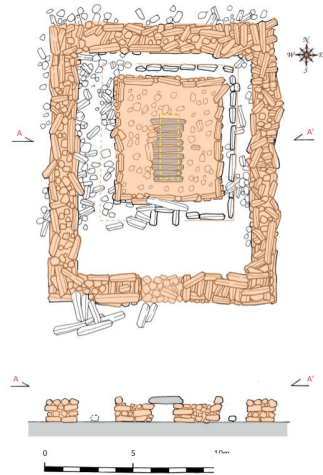


図6 ペイントム遺跡

天井部には1枚の板状を除き、1.0~2.05mの8本の柱状玄武岩が置かれており、南端の1本は石室内に崩落している。北端の天井石は外され、盗掘された可能性が考えられる。

7. 上記プラットフォームの約40cm周囲に柱状玄武岩が並べられている。西側は周壁の

崩れにより、石列は不明である。プラットフォーム南側の中央には、直交する形で柱状玄武岩が置かれており、入り口を示唆している。

8. 遺跡名はポーンペイ語で「*tamw* の祭壇」という意味があり、*tamw* は Temwen を短縮したもので、Soun Temwen という氏族を指している。このロロンはこの氏族の墓であると言われている。伝承によると、この氏族に属するシャチョカワイという少年はナン・マドールのペイラパラップ島に住んでいたが、隠れてキハダマグロを食べた罰としてシャウテレウル王にマールプルと呼ばれる伝説の海の生物の「甲羅」を海の彼方から取ってくるように命じられる。数々の試練を乗り越えてマールプルを持ち帰ったシャチョカワイは、今後このような困難に自分の氏族が遭わないように、氏族全員をペイラパラップの自分の家に集め火を放ったために、全員亡くなりこの氏族は滅んでしまったという。

④ Peilohlo

時間の関係で本遺跡の略測図の作成には至らなかった。しかし観察の結果、周壁と中央に玄武岩を積み上げたプラットフォームが築かれ、中央に炉跡を示唆する凹みが確認された。Peipohn Painapap の形態に類似していることが明らかになった。本遺構に使用された玄武岩の丸石のサイズがやや小さいことから、Peipohn Painapap より新しい時期を推定できる。

⑤ 立柱遺構

遺跡名は不明であるが、Silbanuz 氏によると4本の玄武岩の立石を持つ遺構が Peipohnlong の西側に築造されているらしい。実見に至らなかったが、その場所はナン・マドールの起源地という伝承が残っているらしい。

2. 1. 2 メチップ=トラパイル地域の遺跡

メチップは、ナン・マドールの人工島建設のためにサンゴを供出したことと、ナン・マドール遺跡から出土する身分高位者が身につける精巧なレリーフなどのデザインを施した特殊貝輪を製作した地域として口頭伝承に登場する。したがって、ナン・マドールを基盤にシャウテレウル王朝がポーンペイ島統一した背景や構造を理解する上で、ナン・マドールと地域社会との関連性を考古学的に研究する必要がある。その意味で、メチップ地域周辺を重要な研究対象の一つと考え、2005年から2014年にかけて踏査を含めて5回の調査を実施した。

以下に、今夏実施した Silbanuz 家敷地内遺構と比較研究資料となる当該地域で確認した類似の遺跡を紹介したい。

① Soukrou No.1 遺跡 (図7)

1. 西から東方向の緩やかな傾斜に長軸を合わせて周壁が構築され、11.0×13.8mを測る。
2. 西壁外側の北西と南西周辺の舗装用に遺構の玄武岩の丸石が再利用されている。
3. 内庭部は緩やかな傾斜を水平にするため埋土で整地されている。
4. 周壁の幅は約1.0mで正面の西壁は約1.5mを測り、周壁の四隅には大型柱状玄武岩を突き出した形に積まれている。
5. 西壁の中央に地上より60cmの高さに玄武岩の丸石を敷き詰めた幅1.2mの入り口が設けられており、内側には階段状に平石が置かれている。

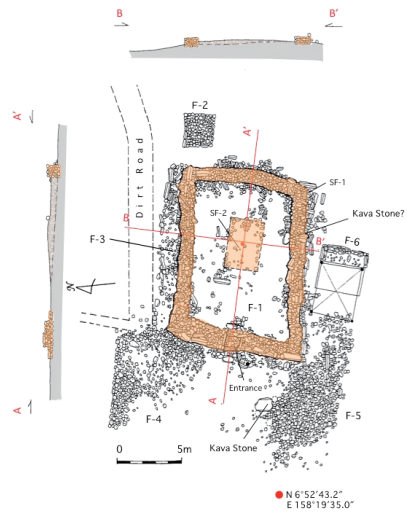


図7 ソウクロウNo.1 遺跡

6. 外観的にはロロンに見えるが、内庭の構築物は墓ではなく推定3×4mの方形の石積み遺構が築かれていたらしい。土地所有者が遺構の北東に隣接した所に2.5m四方の住居を建設する際に、遺構の玄武岩を再利用したため消滅した。
7. 西壁から3m西に大型のカヴァ石が置かれている。また、南壁東寄りの内側にもカヴァ石と考えられる大型の玄武岩が置かれている。

② Soukrou No.2 遺跡 (図8)

1. 北壁および西壁は崩壊しているため規模は不明であるが、西から東方向の傾斜地に約10m四方に玄武岩を40cmの高さに積み上げた幅1.3mの周壁が構築されている。
2. 東壁中央に大型のカヴァ石が置かれている。
3. 内庭の中央に3.8m四方に玄武岩の丸石を約1mの高さに積み上げた石積みのプラットフォームが築かれている。
4. 本遺構から南西約3m地点に湧水地がある。

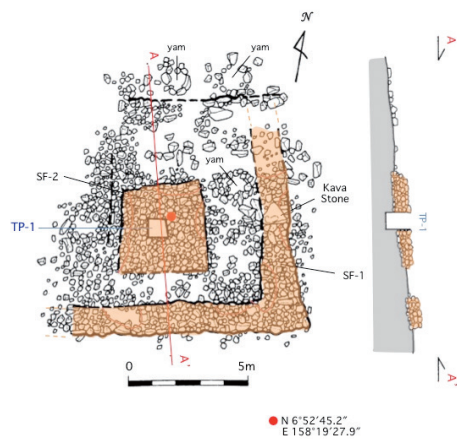


図8 ソウクロウNo.2 遺跡

② Soukrou No.3 遺跡 (図9)

1. 南から北方向の傾斜地に約11.0×13.0mの規模で、幅0.8-1.5mで70cmの高さに玄武岩の丸石と板状の玄武岩を積み上げて周壁を構築している。
2. 周辺のテラス状の石敷きは、遺構の石材を再利用して後世に築造されたものである。
3. 内庭のやや南西寄りに約3.0×3.5mの方形に60cmの高さに玄武岩の丸石を積み上げたプラットフォームが築かれ、東側に幅80cmの玄関側を示唆する石列を確認した。本遺構の南西角に2点のカヴァ石が置かれている。

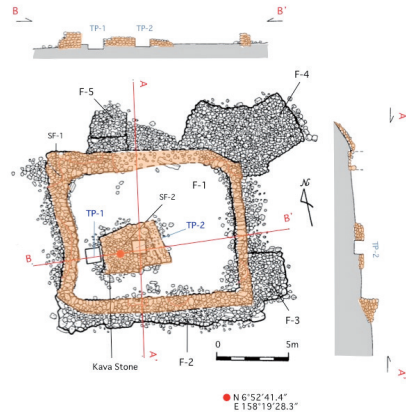


図9 ソウクロウNo.3 遺跡

③ Peinkipahr 遺跡 (図10)

1. 西から東方向の傾斜地に築かれた11.3×15.2mの規模で、幅1.1mの南壁と幅1.4mの西壁を持っている。現地の話によると、遺構の北東部半分は後世の里道建設の際に破壊されたため、北壁および東壁の形態や規模は不明である。
2. 遺構の東側は1.3m下がっており、東壁の南東角には大型の玄武岩が積まれている。
3. 周壁に比較的大型の玄武岩が使用されている。
4. 南壁中央に幅1.5mの入り口が築かれている。
5. 遺構の内外で遺構の玄武岩を再利用して円形に積み上げたヤムイモ栽培用の石囲いを複数カ所確認した。内庭部は観賞用植物の栽培や、最近までウム料理として活用され、中央の石積み遺構は確認されなかった。
6. 内庭の南西隅寄りに大型のカヴァ石が置かれている。
7. ポーンペイ語で「パンダナスの祭壇」という意味を持つこの遺跡名は、ルークという神とウティンガルがナ島へ渡る前に食べたパンダナスの実がこの遺跡になったというシャカオ(カヴァ)の起源神話に由来する (cf. Bernert 1977:63)。この神話の別バージョンでは、この二人はパンダナスの実でできたカヌーに乗ってナ島へ行ったとされ

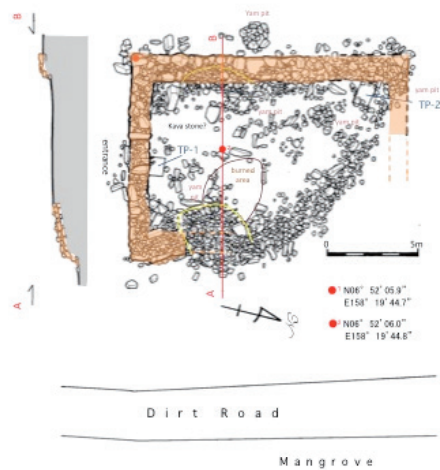


図10 ペインキパル遺跡

る (Fischer et al. 1977:51)。

2.1.3 ナン・マドール遺跡

ナン・マドール遺跡のインベントリーは、言うまでもなく遺跡を理解するための基礎資料となる。9月の世界遺産登録申請に向けて書類の一部としてインベントリー (Thompson et al. 2014) が作成されたが、写真と遺構図を含め考古学研究成果や口頭伝承などの資料を追加する必要があると考えた。また、申請書に付録として挿入された2011年の現状調査報告書は、一部の人工島の記録に過ぎなかった。より多く



図11 ナン・マドール遺跡と調査地点 (原図: HPO, Pohnpei State)

の人工島の現状調査に基づき、破損や崩落や景観の変化の要因を明確にし、周辺の環境と遺跡の将来の保全と保護活動の基礎資料の作成を目指した。

ナンマルキよりナン・マドール遺跡の調査許可を受けた後、限られた時間内で効率よく調査を遂行するため、95島のうち既存の遺構図 (Athens 1980, 1985; Ayres et al. 1983; Ayres 1985, 1993) を使用して現状調査を実施した。基本的にはコンソーシアムの遺跡現状調査 (原本ほか 2011; JIC 2012) と同様、各人工島の観察内容を図面上に記録し、細部の写真撮影を行った。まず、人工島間を連結した訪問者用トレイルに沿った遺跡の調査を行ない、干潮時には低水位になった人工島間の水路を利用して踏査を行った。

その結果、27の人工島、ナーカップ湾に面した3重の周壁 (ナンムルセイ)、ナンムルセイから北端に位置するペイニオットにつながる石敷きの回廊状遺構 (ポーンモエイロック) の現状調査を行った。また、人工島間の水路を利用して調査した際、ペイカップ、ペイラパラップ、ブラック、ペイカップ・サパラス、パーセイト=ウセンタウ、レメンカウの6人工島の周壁の観察を行った。調査は主に宿泊地からナンタワスに至る訪問者用トレイルを利用して行ったため、上ナン・マドールに集中し26の人工島を数えた (図11-12)。また、既存の遺跡平面図が上ナン・マドールに偏っていることにも起因している。因みに、アセンズ (Athens 1985) が記載しているようにリキンペイにはAとBの2人工島が存在し、人工島名を踏襲しているハンブルク (Hambruch 1936) の平面図には1人工島しか記載されていない。また、ウセンペイ周辺の人工島にも複数の研究者による平面図の間に合致しない人工島が存在することを確認した。

ミクロネシア連邦ポンペイ島のナン・マドール遺跡とシャウテレウル王朝期の遺跡について

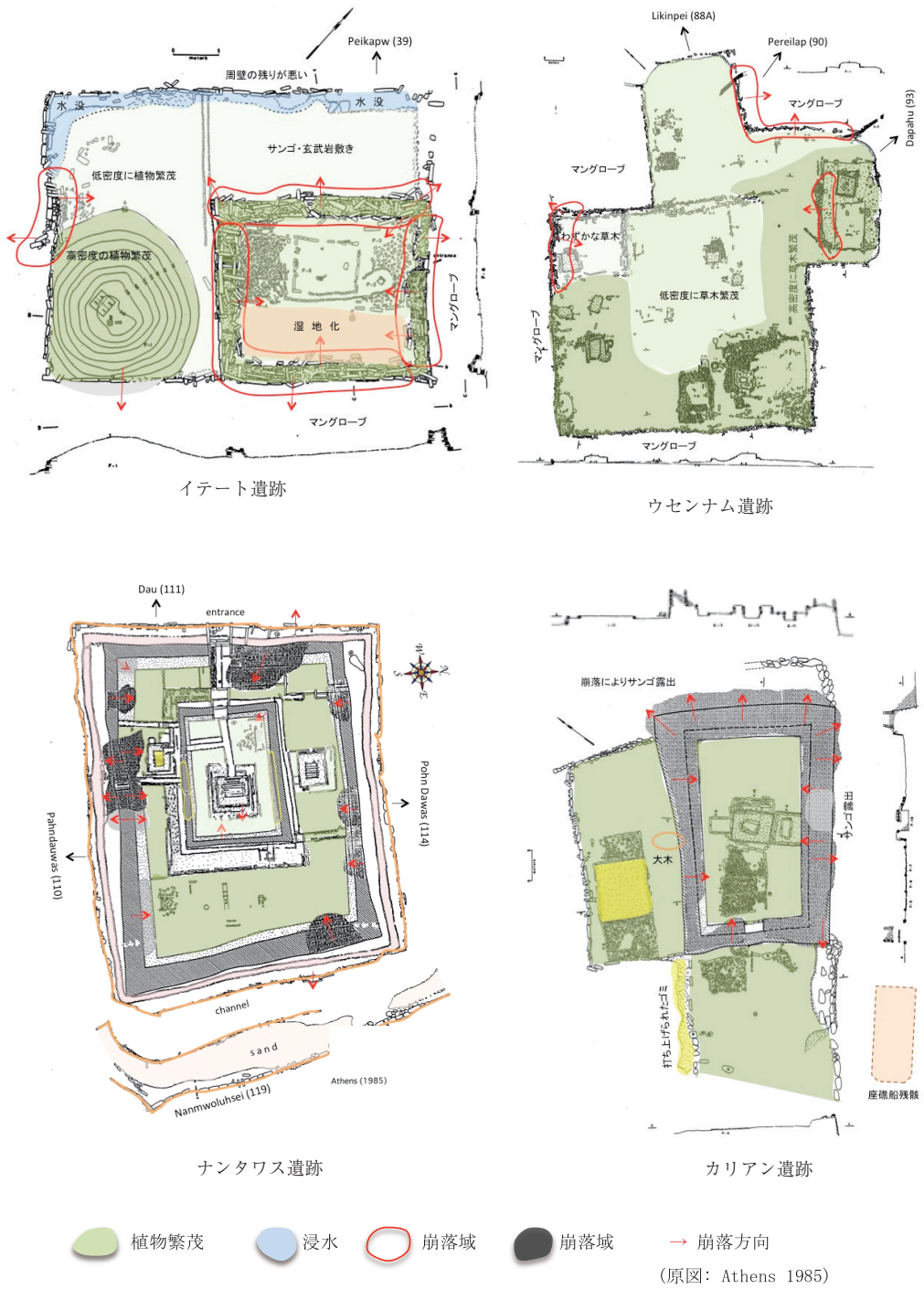


図12 人工島の現状調査結果

3. 考察

今夏実施したテムエン島内の遺構群と島麓に築かれた巨大なナン・マドール遺跡の調査成果は、以下の通りである。

テムエン島内の遺構群は、ナン・マドール遺跡との関連とシャウテレウル王朝による全島支配の構造や背景を理解する上で、2005年以降数度に渡って調査を実施したメチップからトラパイルに至る半島地域で確認した遺構群と比較研究の良好な資料となった。また、時間的制約により詳細な調査は出来なかったが、ホームステイ先となった Silbanuz 家敷地内の Peilolo 遺跡は、今まで知られてこなかった祭祀場跡で、類似遺構の時期的変化や地域における遺構の組み合わせを理解する上で重要な発見となった。

Ayres and Mauricio (1997) は、ナン・マドール遺跡内の埋葬形態の相違を身分階層の反映と考え（1）石室を持つ墓（上層階級）、（2）プラットフォームによる住居内の埋葬（中層階級）、（3）特定の形態を持たない埋葬施設（下層階級）の3形態に分類している。ただし、（2）には周壁を持たない遺構が含まれている上、玄武岩の丸石を方形に積み上げただけの遺構がどのタイプに分類されるかは不明である。一方 Seikel (2011) は、ナン・マドールにおける墓の形態が単に身分階層を反映するだけでなく、埋葬習慣の時代的变化にも起因していると述べている。また、全島支配を果たしたシャウテレウル王朝の基盤としてのナン・マドールは特殊な遺跡のため、遺構形態が他の地域社会のそれらとは異なる可能性も視野に入れる必要がある。

テムエン島とメチップ＝トラパイル地域で確認した周壁と内庭部に方形の構築物を持つ遺構を、試案として3タイプの分類を試みた。タイプ1は内庭に石室を持つ墓で Ayres and Mauricio のタイプ（1）に相当する。タイプ2は内庭に炬状の遺構を持つ住居跡と考えられるプラットフォームで、Ayres and Mauricio のタイプ（2）に相当する。タイプ3は玄武岩の丸石を積み上げた石積み遺構である。メチップ地域の Soukrou No.1 遺跡とトラパイル地域の Peinkipahr 遺跡については、内庭部の構造が消滅し不明なためタイプの分類は難しい。これらの異なるタイプが被葬者の身分差と関係するのか、用途の違い（埋葬施設か祭祀場）によるものなのかは今後検討していく必要がある。ただし、墓が祈りの場として使われていたことは口頭伝承にみられ、メチップ地域の遺構を除き共通して「石の祭壇」という意味の Pei の名が付けられている。つまり、それらが祭祀場であった可能性が高い。その意味で、メチップの遺跡名について再確認の必要がある。また、メチップからトラパイル地域に築造された4基の全遺構にカヴァ石が伴っており、それらが儀式や儀礼に関係していたことを示唆している。Silbanuz 家敷地内の遺構ではカヴァ石が確認されなかったが、後世に再利用の目的で遺跡から持ち出された可能性がある。

4. 世界文化遺産登録申請の進捗状況

ミクロネシア政府は、今年9月に暫定版ではあるが登録のための申請書を世界遺産センターに提出した。2011年2月の現地調査の成果は多めでその後の活動や事業に大きく貢献する結果となった（原本ほか 2011；石村 2013a, 2013b, 2014）。もちろん、現在に至る多くの研究者による膨大な資料と研究成果の蓄積によって申請が可能となったことは言うまでもない。

2011年の調査は時間的な制限があったため、人工島を連結した訪問者用のトレイルと水路をボートで移動しながら、口頭伝承や考古学研究に最重要だと考えられる人工島を選出し、詳細な現状調査を行った。将来の遺跡の保全と保護を理解する目的で、既存の遺構図を利用し、遺構の崩壊や植物繁茂の状況を詳細に記録した。現状調査の成果は、人工島や遺構の破損の要因を理解する上で不可欠な基礎資料となった。また、連邦政府と州政府の関係諸機関や、地域住民たちのナン・マドール遺跡の世界遺産に関わる意識調査は、その後のワークショップなど登録申請に向けての一連の活動に大きく貢献することになった。たとえば、同年11月にはナン・マドール遺跡保護に関する専門会議がポーンペイ州で開催された。考古学者だけでなく環境や観光の専門家に加えて、伝統チーフ、教育大臣、州知事、連邦政府の公文書・文化・歴史保存局局長、マタレニーム地区の代表者らが一堂に会した。その後、オーストラリアの専門家を中心としたワークショップが開催され、様々な問題点について議論され検討が行われてきた。2012年には、石村が海底都市伝説が伝えられているナン・マドール遺跡東側のナーカップ湾の海底地形図作成を試した（Ishimura 2014）。

奈良文化財研究所の石村智氏によると、世界文化遺産登録に至るまで以下の審査プロセスが想定される。

- ・2015年2月 申請書（完全版）を世界遺産センターに提出
- ・2015年春～夏 ICOMOSによる審査、必要に応じて追加書類提出
- ・2015年夏～秋 ICOMOSによる現地評価ミッション派遣
- ・2016年5月 ICOMOSにより勧告書提出
- ・2016年6月 第40回世界遺産委員会で審査

5. まとめと今後の課題

ナン・マドール遺跡に隣接するテムエン島の Silbanuz 家敷地内に残された、儀式や儀礼に関係したと考えられる3形態の遺構を確認した。テムエン島全体における遺構の組み合わせを明確にし、ナン・マドールとの関係を理解する上で重要な資料となった。また、ポーンペイ島の各地域に築かれた同類の遺構から、ナン・マドールを基盤にポーンペイ全島を統一したシャ

ウテレル王朝の支配構造を理解する上で重要な比較資料となった。

本稿で示したように、これらの遺構は各地域に営まれたシャウテレル王朝期の村落で、支配下における地域社会の構造を反映している。今後、全島支配の時期と構造と先史村落に関するさらなる研究を展開したいと考えている。

ナン・マドール遺跡については、ミクロネシア連邦政府から依頼を受け、日本の文化遺産国際協力コンソーシアムが、ユネスコ世界文化遺産登録に向け2011年に現状調査を実施した。その成果に加え、今夏の現状調査は崩落や崩壊や景観の変化についてより多くの遺跡の現状を明らかにした。その後、奈良文化財研究所の石村を中心とする日本チームは、登録申請書の作成や世界遺産についての啓蒙活動や現地の組織作りのためのワークショップを実施してきた。

また2012年には、石村はナン・マドール遺跡東側のナーカップ湾の海底地形図作成のための調査を行った。その後、連邦および州両政府の歴史保存局など関係機関、土地所有者、観光や環境や文化財関連の専門家らによるワークショップが開催された。予定していた今年の2月の世界遺産センターへの申請は書類の不備という理由で見送ったが、2015年2月に申請できるような活動が進行中で、我々も協力を継続中である。遺跡のインベントリー作成と現状調査を目的とした本調査による収集情報が、世界文化遺産登録申請書の改善と追加資料となることは確実である。

謝 辞

ナン・マドール遺跡の調査許可をいただいた伝統首長ナンマルキの Kerpet Hebel 氏、調査支援をいただいたミクロネシア連邦政府の Rufino Mauricio 教育大臣、Pius Hadley 資源開発局局長、Augustin Kohler 歴史保存局局長、Mordain David ポーンペイ州歴史保存局局長および職員の皆様に深謝申し上げます。また、本稿に調査報告書の使用を快諾いただいた International Archaeological Research Institute, Inc.のStephen Athens 博士に厚くお礼を申し上げます。

おわりに、ナン・マドール遺跡の世界文化遺産登録に向けて活動中の日本チームの中心的研究者である奈良文化財研究所の石村智氏、今夏の調査に協力をいただいた法政大学探検部員の仲川舜人、山本麟太郎、本田裕菜、中牟田歩実、三浦凌の各氏、調査期間中ホームステイの快諾と多大なご支援をいただいた Masao Silbanuz さんご家族に深く御礼申し上げます。

*本研究は JSPS 科研費 25300042の助成を受けたものである。

参考文献

(邦文)

- 石村智 (2013a) 「遺跡・遺産は地域住民にどのように認知されるのか -ミクロネシア連邦ナン・マドール遺跡の事例-」『パブリックな存在としての遺跡・遺産』pp. 16-20. 奈良文化財研究所.
- 石村智 (2013b) 「ミクロネシア連邦ナン・マドール遺跡の保存と活用にかかる国際協力」『良文化財研究所紀要』pp. 10-11.
- 石村智 (2014) 「大首長と遺跡保存」『みんぱく』4月号. pp. 4-5.
- 片岡修 (2005) 「ミクロネシア連邦ポーンペイ島の先史時代に於ける首長制の理解に向けて - 巨石建造遺跡ナン・マドールの考古学研究 - ①」『第36回三菱財団事業報告書』pp. 428-431. 財団法人三菱財団.
- 片岡修 (2006a) 「ミクロネシア連邦ポーンペイ島の先史時代に於ける首長制の理解に向けて - 巨石建造遺跡ナン・マドールの考古学研究 - ②」『第37回三菱財団事業報告書』pp. 353-355. 財団法人三菱財団.
- 片岡修 (2006b) 「遺跡から見た海洋資源の利用：ポーンペイ島ナン・マドール遺跡の場合」『環境と資源利用の人類学 - 西太平洋諸島の生活と文化 -』印東道子編. pp. 197-217. 明石書店.
- 片岡修 (2007) 「ミクロネシア連邦ポーンペイ島の先史時代に於ける首長制の理解に向けて - 巨石建造遺跡ナン・マドールの考古学研究 - ③ (完)」『第38回三菱財団事業』pp. 377-379. 財団法人三菱財団.
- 片岡修 (2009) 「シャウテレウル王朝による全島支配と地域社会の関係について -ミクロネシア連邦ポーンペイ島メチップ地域の考古学的研究-」『高梨学術奨励基金年報 平成20年度研究成果概要報告』pp. 141-149. 財団法人高梨学術奨励基金.
- 片岡修 (2010) 「シャウテレウル王朝による全島支配と地域社会の関係について -ミクロネシア連邦ポーンペイ島メチップ地域の考古学的研究②-」『高梨学術奨励基金年報 平成21年度研究成果概要報告』pp. 112-119. 財団法人高梨学術奨励基金.
- 片岡修 (2011) 「ミクロネシア連邦 ポーンペイ島のナン・マドール遺跡」『考古学研究』58(3): 111-114.
- 片岡修 (2013) 平成25年度科学研究費助成事業 実績報告書 (研究実績報告書).
- 片岡修・長岡拓也 (2014) 「ミクロネシア連邦ポーンペイ島の調査成果と今後の課題」第234回東南アジア考古学会例会 (口頭発表).
- 長谷部言人 (1915) 「東カロリン土人に就いて」『人類学雑誌』30(7): 262-275.
- 原本知実・石村智・片岡修 (2011) 「文化遺産国際協力コンソーシアムによるナン・マドール遺跡調査と将来の展望」第28回日本オセアニア学会 (口頭発表).
- 村主岩吉 (1942) 「ボナベ島の人類遺跡並にナンマタール遺跡概要」『科学南洋』4(3): 218-225.
- 八幡一郎 (1932) 「椰壁の秘寶」『ドルメン』pp. 15-18. 岡書院.
- 八幡一郎 (1959) 「ミクロネシア」『世界考古学大系』15: 128-163. 平凡社.

(欧文)

- Athens, Stephen, J. (1980) *Archaeological Investigations at Nan Madol: Islet Maps and Surface Artifacts*. Pacific Studies Institute, Guam.
- Athens, Stephen, J. (1985) *Nan Madol: Archaeology of a Pohnpeian Chiefdom Center*. A Report Submitted to Office of Historic Preservation, Trust Territory of the Pacific Islands, Saipan.
- Athens, Stephen, J. (2007) The Rise of the Saudeleur: Dating the Nan Madol Chiefdom, Pohnpei. *Vastly Ingenious: The Archaeology of Pacific Material Culture* ed. by A. Anderson, K. Green and F. Leach, pp.191-208. Otago University Press.
- Ayres, William S. (1985) *The Archaeology of Nan Madol, Ponape, Micronesia (Eastern Caroline Islands)*. Preliminary report on 1984 field research submitted to the National Geographic Society.
- Ayres, William S. (1990) Pohnpei's Position in Eastern Micronesian Prehistory. *Micronesica*, Supplement, 2: 187-212.
- Ayres, William S. (1993) *Nan Madol Archaeological Fieldwork. Final Report*. A Research and Historic Preservation Project 1987-1990.
- Ayres, William S. (2002) Island Archaeology and Issues of Political Centralization: Micronesian Evidence. *World Islands in Prehistory*, Edited by W.H. Waldren and J.A. Ensenyat. BAR International Series 1059: 57-67.
- Ayres, William S. and Alan E. Haun (1980) *Ponape Archaeological Survey: 1977 Research*. Micronesian Archaeological Report No.1. Saipan: Historic Preservation Office.
- Ayres, William S., Alan E. Haun, and Rufino Mauricio (1983) *Nan Madol Archaeology: 1981 Survey and Excavations*. Micronesian Archaeological Survey Reports. Unpublished. Saipan: Historic Preservation Office.
- Ayres, William S., Alan E. Haun, and Craig Severance (1981) *Ponape Archaeological Survey: 1977 Research*. Micronesian Archaeological Reports No.4. Saipan: Historic Preservation Office.
- Ayres, William S., Katherine Seikel and Maureece Levin (2009) *Archaeological Remains at Angier-Karian, Nan Madol with Supplemental Studies at Sokehs and Temwen, Pohnpei, Federated States of Micronesia*. Submitted to the FSM Historic Preservations Office and the Pohnpei State Historic Preservation Office, Federated States of Micronesia.
- Ayres, William S. and Rufino Mauricio (1997) *Salapwuk Archaeology: A Survey of Historic and Cultural Resources on Pohnpei, Federated States of Micronesia*. Micronesian Resources Study. Federated States of Micronesia and U.S. National Park Services.
- Bath, Joyce E. (1984) *A Tale of Two Cities: An Evaluation of Political Evolution in the Eastern Caroline Islands Micronesia Since A.D. 1000*. Unpublished Dissertation, University of Hawaii.
- Bath, Joyce E. and Stephen J. Athens (1990) Prehistoric Social Complexity on Pohnpei: The Saudeleur to Nahmawarki Transformation. *Micronesica*, Supplement, 2: 275-290.

- Bernart, Luelen (1977) *The Book of Luelen*. Translated and edited by John L. Fischer, Saul H. Riesenbueg, and Marjorie G. Whiting. Pacific History Series 8. University of Hawaii Press.
- Christian, F. W. (1899) *The Caroline Islands*. London: Methuen & Co.
- Fischer J., S. Riesenbueg, and M. Whiting (1977) Annotations to the Book of Luelen. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Galipaud, Jean-Christophe (2001) Le Peuplement Initial de Pohnpei. *Journal de la Societe des Oceanistes*. 112: 49-6.
- Government of the Federated States of Micronesia (2013) *Ceremonial Center of the Eastern Micronesian States*: UNESCO World Heritage Nomination.
- Gulick, Luther H. (1857) The Ruins on Ponape or Ascension Island in the Pacific Ocean. *The Friend*, 6(8): 57-60.
- Hadley, Masao (1987) *Nan Madol: Spaces on the Reef of Heaven*. Edited and translated by Paul M. Ehrlich.
- Hambroch, Paul (1936) *Ponape. Ergebnisse der Sudsee-Expedition 1908-1910* ed. by Thilenius. Hamburg: Friederichsen, DeGruyter.
- Hezel, Francis X. (1979) *Foreign Ships in Micronesia*. Published in cooperation with the Trust Territory Historic Preservation Office and the U.S. Heritage Conservation and Recreation Service.
- Intoh, Michiko (1999) *The Catalogue of Prehistoric Micronesian Artifacts Housed in Japan*. Micronesian Archaeological Survey Report No. 34. Division of Historic Preservation, Department of Community and Cultural Affairs, Saipan.
- Ishimura, Tomo (2014) Underwater Survey at the Ruins of Nan Madol, Pohnpei State, Federated States of Micronesia. *Proceedings of the 2nd Asia-Pacific Regional Conference on Underwater Cultural Heritage*, Honolulu, pp. 227-240.
- JCIC (2012) *Survey Report on the Present State of Nan Madol, Federated States of Micronesia*. 2010 Survey for International Cooperation, Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage.
- Kataoka, Osamu (in prep.) *Archaeological Investigations on Metipw Area of Pohnpei, Federated States of Micronesia, Phase II: Towards an Understanding of the Local Society under the Chieftain System in Prehistoric Pohnpei*. Final report to be submitted to Historic Preservation Office, Pohnpei State, Federated States of Micronesia.
- Kataoka, Osamu, Rintaro Ono and Takuya Nagaoka (in prep.) *Pohnpei Archaeological Survey: 2005 Research*. A report to be submitted to Historic Preservation Office, Pohnpei State, Federated States of Micronesia.
- Kataoka, Osamu and Takuya Nagaoka (in prep.) *Archaeological Investigations on Metipw Area of Pohnpei, Federated States of Micronesia, Phase I: Towards an Understanding of the Local Society under the Chieftain System in Prehistoric Pohnpei*. A report to be submitted to Historic

- Preservation Office, Pohnpei State, Federated States of Micronesia.
- Kubary, J. S. (1874) Die Ruinen von Nanmatol auf der Insel Ponape nach J. Kubary's Brieflichen Mittheilungen. *Journal des Museum Godeffroy*, 3(6): 123-131.
- Lutke, F. (1971) *Voyage autour du Monde 1826-29*. New York: Da Capo Press.
- McCoy, Mark D., and J. Stephen Athens (2012) Sourcing the Megalithic Stones of Nan Madol: an XRF Study of Architectural Basalt stone from Pohnpei, Federated States of Micronesia. *Journal of Pacific Archaeology*, 3(1): 105-114.
- NOAA (1990) *Local Climatological Data: Annual Summary with Comparative Data, 1989, Pohnpei Island, Pacific*. National Oceanic and Atmospheric Administration, Environmental Data and Information Service, National Climatic Center, Asheville, North Carolina.
- O'Connell, James F. (1836) *A Residence of Eleven Years in New Holland and the Caroline Islands*. Boston: B. B. Musse
- Office of Planning and Statistics (1979) *Ponape Island: Land Use Guide*. Saipan: Office of the High Commissioner, Trust Territory of the Pacific Islands.
- Panholzer, Thomas and Rufino Mauricio (2003) *Place Names of Pohnpei Island*. Bess Press, Inc.
- Radiocarbon (1968) Ponape Series. *Smithsonian Institution Radiocarbon Measurements II*. pp. 253-254.
- Riesenburg, Saul H. (1968) *The Native Polity of Ponape*. Smithsonian Institution Press, Washington.
- Sarfert, Ernst (1913) Ausgrabungsfunde von Nan Matol auf Ponape. *Museums fur Volkerkunde zu Leipzig*, 5: 33-37.
- Saxe, Arthur A., Richard A. Allenson and Susan R. Loughridge (1980) *The Nan Madol Area of Ponape: Researches into Bounding and Stabilizing an Ancient Administrative Center*. The Trust Territory Historic Preservation Office, Saipan.
- Seikel, Katherine (2011) Mortuary Contexts and Social Structure at Nan Madol, Pohnpei. *Journal of Island and Coastal Archaeology*, 6: 442-460.
- Thompson, Adam, Helen Anderson and Osamu Kataoka (2013) An Inventory of the 94 Islets of Nan Madol. An Appendix to the World Heritage Nomination of the Ceremonial Centers of the East Caroline Islands.

(かたおか・おさむ 国際言語学部教授)
(ながおか・たくや 古代学協会客員研究員)